

前提としての『^{みじょう}身上さとし』

本連載の目的は、「おさしづ」における「身上さとし」(身体上の患いを通した親神からの論し)を文脈に即して考察し、その身上に込められた神意を探究していくことである。

このようなアプローチの前提には、『教理研究身上さとし—おさしづを中心として—』(深谷忠政、天理教道友社、1962年。以下『身上さとし』)がある。本書は教学の研究書であるが、一般の信者たちにも広く読まれた信仰の書でもある。まず本書の研究の特徴を確認し、本連載の見通しを立てておきたい。

『身上さとし』の執筆動機には、次のようなことが挙げられている。すなわち、

- ・身上(病気)は「日常生活の破綻」の最も深刻なものであり、「身上さとし」がお道の教説の上で重要な部分を占めていること。
- ・「身上さとし」を個人の体験や思いつきではなく原典に基づいて研究すること。
- ・医療に対する「身上さとし」の意義を確認すること。

これらの動機には、著者の北米布教の体験が色濃く反映されている。若い頃から海外布教を志していた著者は1959年に39歳でアメリカ伝道庁4代庁長を拝命し、それ以降1965年に帰国するまで北米布教に従事していた。1962年に出版された本書の大部分はアメリカで執筆されたようである。本書では次のように述べられている。

医療の設備のととのったアメリカにおいて、「身上たすけ」従って「身上さとし」は不要であるという、渡米当初に聞いた話は、日がたつにつれて必ずしもそうでないことが判明して来た。

病気が如何に生活を脅かすかという問題は、日本より遙かに深刻で、身上に際しておさづけを喜び、身上さとしを聞こうとする傾向は意外に強いものがあるように思われる。⁽¹⁾

このように「身上さとし」は信仰の最初の契機となる教説であり、おたすけの現場(海外を含む)においてその意義が確認されるものである。その意味で、おたすけの実践が一層求められる現在においても、なお探究されるべきであろう。

ただし、著者はこのように「身上さとし」の意義を説きつつも、それはあくまで「おつとめ」完修のための補助的なものであって、そのみに終始してはならないと指摘する。「身上さとし」を説くことの上手や下手にとらわれるのは本末転倒であり、「身上さとし」を説く場面では、おさづけの取り次ぎやつくし運びなどの信仰実践が伴われなければならないと述べられている。

さて、このような教理全体における「身上さとし」の位置づけという点にも関連して、著者は、おさしづ研究にもとづく「身上さとし」について以下のような重要な指摘をしている。すなわち、

- ・「おさしづ」の「身上さとし」では、「Aの病気に対してはAという論し」というような一義的な解答は得られないこと。
- ・「おさしづ」の割書きに記された病状は、大雑把にしか分からず、医学的な病名のようには知り得ないということ。
- ・同一の病状でも、ある人と別の人とでは、そのお論しの内容が違ふ場合が多いこと。
- ・同一人物に対して、病状は異なるものの、同じ内容のお論しがあること。

つまり、「身上さとし」は病気に対する教説ではなく、あくまで

病人に対するものであり、根本的にそれ自体で閉じた教理体系ではない。そもそもお道の「論し」は、聞き手の「悟り」を前提にしたものであり、その意味で個性(文脈依存性)が高いものといえる。まして当人たちの「悟り」が強く求められるような事情・身上の場面では、その論しの個別的な性格も一層高くなるであろう。

その上で、『身上さとし』ではそうした悟りを得るための手がかりとして、類型的指示という、いわば病状別の最大公約数的な論しを提示する手法が採用されている。たとえば頭痛であれば、ある人の頭痛への論しと別の人への論しのおおよその共通点が見出され、それが頭痛に対して一般的に言い得る「身上さとし」として示される。そして、そのような手法に、次のように積極的な意味が見出されている。

このような類型的指示を見て、期待はずれの感をいだかれる人が多いと思うが、重箱のすみをほじくるような融通のきかない「身上さとし」に比較して、一見漠然としたところに、かえってその人をきずつけないようにという深い思いやりのある神意と、おさしづに基づく「身上さとし」の普遍性を汲み取るべきであろう。⁽²⁾

このように本書では、類型的指示という方針のもとで「頭痛」「目の障り」「耳の障り」といった病状に対応する「身上さとし」が提示されている。それは個々別々の状況に対して一義的な解答を示すものではないが、悟りを得るための一定の基準を示すものであり、本書の簡潔明瞭な文体で記された「身上さとし」は身上で悩む者に的確に語りかけてくるように思われる。本書が長年にわたって版を重ねているという事実が、そこから実際さまざま手がかりを得た信仰者が多数いることを裏付けているといえよう。

本連載のアプローチ

ところで、『身上さとし』では、「頭」「眼」「耳」などの器官ごとに項目が立てられているが、細かく見ていくと、実は異なる器官に対して同一の「おさしづ」が取り上げられている場合がある。たとえば、明治21年5月22日(陰暦4月12日)「増野正兵衛鼻の奥、左胸腹の下出物出来、胸むかつき気分悪しく身上障りに付伺」に対する「おさしづ」は、『身上さとし』では「鼻」と「胸」(「胸むかつく」)の両方の項目に登場している。あるいは、明治22年7月1日(陰暦6月4日)「増野正兵衛六月二十五日より二十七日まで三日間、毎朝一度腹下り、二十八日おぢばへ出て止まり、頭痛胸むかつくに付伺」に対する「おさしづ」は「胸」(「胸むかつく」)と「腹」(「腹下り」)の両方に使われている。

こうした事例は、「胸」や「腹」といった分け方とは違う探究の仕方の必要性を示しているのではないだろうか。先に記したように、そもそも『身上さとし』でも「同一の病状でも、ある人と別の人とでは、その論しが違ふ場合が多いこと」や「同一人物に対して、病状は異なるものの、論しの内容が同じ場合があること」が指摘されている。そうした点を鑑みると、「おさしづ」にもとづく「身上さとし」に対しては類型的な捉え方に加えて、個別的な文脈に即した読み方が必要であると考えられる。

本連載は、こうした観点から「頭痛」や「腹痛」など割書きに見られる病状に注意を払いつつも、それらを類型的に整理するのではなく、その都度の個々の文脈に即して、その身上に込められた神意を探究する方途を取っていきたい。

[引用文献]

(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として—』天理教道友社、1962年、9頁。

(2) 同書、8頁。